

そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。そして、ザカリアの家に入ってエリサベトに挨拶した。マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった。エリサベトは聖霊に満たされて、声高らかに言った。「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いです。」

-ルカ 3章-

喜ぶ人になるために

依存症という病は、いのちが飢え渴く病と言われます。いのちが何に飢えているか分からないまま、これと思うものにすがって取りつかれ、やがてすがったものに殺されていく病です。

その人を助けようと周りが与えるものは、もっともっと彼を飢え渴かせ、苦しませることになります。人間には手立てがなく、従って彼らは自分の信じる神(ハイヤーパワー)にすがりしか手立てがなく、どこから発症した病なのか知るために、いのちの誕生にまで遡ります。

無条件の愛(大切)を必要として最も弱く貧しく生まれてくる命は、その状態で危険を察知すると、生涯消えることのない「命の危機」が体にインプットし、理性で処理できない間は潜伏期間をもって、自我の確立とともに表面化し、そうなるともはや、他の助けはすべて退けて自分で自分を守るようになり周りは手が付けられない状態になるのです。

私にはかつて、家庭の中に機雷が浮かんでいるかのように、気を遣わないではいられない兄弟がいました。その兄弟から学んだ言葉があります。「小さい者の叫びには意味がある」この言葉を聞いたある日気づいたのです。私の気遣いは、兄弟には、「わしに気を遣わなければならない程、わしは面倒な人間ということか」と思わせ続けていたと。兄弟の叫びが真に求めているのは、「私が私のままで生きられる安心」だったと気づかないで。

「救いに飢え渴いている人」とは、人が人を苦しめて文句を言わせないシステムの世界で、生きるためのいのちが生きられないで飢え渴いている、このような小さくされた人たちだと気づかないで。彼らは勝利者となって他を従わせることを望んでいるのではなく、今、いのちが生きられる安心な世界が欲しいだけだったと気づかないで。

彼らにこれを与えることができるのは、きれいごとを述べ立てている司祭ではなく、いのちの飢え渴きの中を潜り抜けた体験者だけだと教えられたのです。体験のない、成功志向者には無縁で見えないものだからです！

だから主は、ユダの土族の中で一番小さいベツレヘムの、一番貧しい飼葉桶の中から救いを必要としている世界全体を眺めてくださるのだと気づかされたのです！

